

# 人々は水族館に何を求めて訪れるのか？

- 水族館の新たな社会的役割のために -

西 村 千 尋

## 1. はじめに

水族館は、博物館法によって、博物館の一形態であると規定されている。つまり水族館は社会教育施設として公益性の高いものでなくてはならないが、その収集・調査や展示・飼育施設の観点からすると、明らかに通常の博物館とは異なるのが現実である。水族館の活動としては、鈴木と西<sup>1)</sup>によると、水族収集・調査活動、水族の研究、学習支援活動、少数の来館者・障害者への配慮とされている。さらに、水族館の社会的寄与として、地域生物相の調査と野生生物保護、生涯学習の振興、地域への社会的貢献が挙げられている。

現在では、海浜部だけでなく、京都水族館やすみだ水族館など内陸型水族館の開館に代表されるように、地域による熱心な水族館誘致の動きもある。また、私立水族館が入館者減少を理由に打ち出した閉鎖の方針に対し、地域社会が存続のための支援を行った例もある<sup>1)</sup>。このことは、水族館の存在が地域社会に対する経済的寄与への期待の大きさを示すものである。

そのような状況の中、水族館においても全国一律の金太郎飴的展示ではなく、地域の個性を明確にした取り組みを行っている。例えば、先の京都水族館は京料理に関連した展示を行っており、他の水族館との差別化を図

る動きが見られる。つまり水族館の社会的存在意義として、地域への誇りや愛着の醸成といった地域づくりの一翼を担うべき立場にあると言える。

ところで、著者の研究室では、大学近隣に存在する国立公園や水族館などをフィールドに、「自然館環境を活かした地域づくり・健康づくり」のテーマのもと、教育研究活動を展開している。その一環として、水族館をストレス社会における新たな健康づくりの場として活用する可能性について、心理学的な測定や生理学的な測定により得られた科学的根拠に基づいた提言と情報発信を、所属する学生とともに行ってきた<sup>2-4)</sup>。つまり、これまで水族館の活動あるいは地域社会への寄与<sup>1)</sup>として意識されていなかった、または薄かった健康づくりでの地域社会への貢献という観点から、地元水族館と連携して検討を行っている。

そこで、本研究では、水族館において行った過去のアンケート調査をもとに、地域密着型をコンセプトにしている地元水族館に対して、人々が何を求め訪れるのか、その経年変化と要因を探り、健康づくりの場としての水族館の新たな社会的役割の可能性について検討することを目的としている。

## 2. 調査方法

### (1) アンケート調査

アンケート調査は自記式無記名アンケートにより、西海国立公園九十九島水族館海きららにおいて、2011年9月および2013年9月に行った。なお、本研究は2011年の水族館のイメージ調査および2013年のイルカプログラムに関する調査において行ったアンケート項目の一部を抜粋して分析を行った。検討した項目は、来館目的、発地、年代、来館回数(2013年のみ)である。なお、来館目的は「いやし」「娯楽」「学習」「観光」「自然体験」「景観」「その他」の選択肢を設け、複数回答可とした。

アンケートは、2011年は157名、2013年は211名から回答を得ることがで

きた。

## (2) 分析

アンケートの結果の分析は、IBM SPSS Statistics Version 20を用いて行った。調査年と来館目的、発地、年代、およびリピーター・初来館者と来館目的の関連性について、独立性の検定である Pearson の  $\chi^2$  検定を用いて分析を行った。なお、有意水準は5%未満とし、未記入の項目がある場合は欠損値として扱った。

## 3. 結果

### (1) 年代および発地

図1に来館者の年代を示した。2011年と2013年では有意な関連性は認められなかった。すなわち経年的にみても年代に関係なく来館していると言える。強いて言うならば、2011年に見られた30代中心の来館者が、2013年には各年代に分散した傾向にあると言えるかもしれない。この件については今後さらに継続的な調査が必要であろう。注目したいのは、60歳以上の増加であり、孫を連れての来館がひとつの形になっていることがうかがえる。

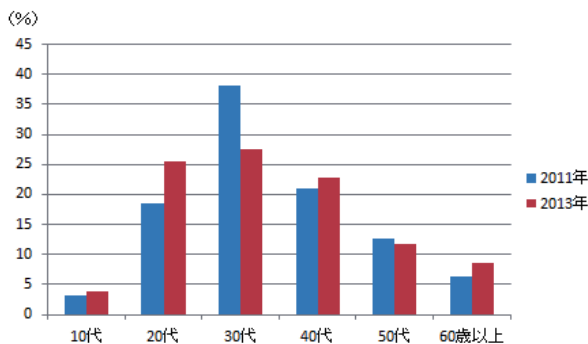


図1. 来館者の年代

一方、発地については、図2に示すように、2011年と2013年で違いが見られた ( $p < 0.01$ )。2011年は福岡からの来館者が最も多かったのに対し、2013年は佐世保市内を除く長崎県内からの来館者が最も多かった。また、2011年に比べ、2013年は佐賀県からの来館者も増えている。さらに、九州外からの来館者も15%程度存在するのは2011年も2013年も変わらない。このことから、九州圏内では安近短の旅行の目的地となっていることがうかがえる。

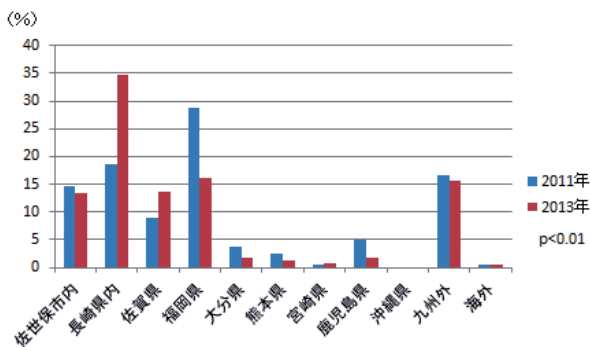


図2 . 来館者の発地

## (2) 来館目的

2011年と2013年の来館目的の比較を行った結果が図3である。2011年に比べ2013年には「観光」と「景観」が減少している (いずれも  $p < 0.05$ )。一方、「いやし」( $p < 0.01$ )、「自然体験」( $p < 0.05$ )、「その他」( $p < 0.05$ )は2011年に比べ2013年は増加している。特に、2011年に来館目的のトップであった「観光」が、2013年には「いやし」にトップの座を譲っている。「その他」については、イルカまたはイルカのプログラムを目的に来たという記述がいくつか見られた。

さらに、来館目的に関して詳細な検討を行うため、2013年のアンケート調査から2回以上来館している来館者をリピーターとして設定し、初来館者との比較を試みた。その結果が図4である。初来館者の5割以上は「観

光」( $p < 0.01$ )を目的に水族館を訪れていること、そしてリピーターの5割以上は「いやし」( $p < 0.05$ )を求めて来館していることが明らかとなった。

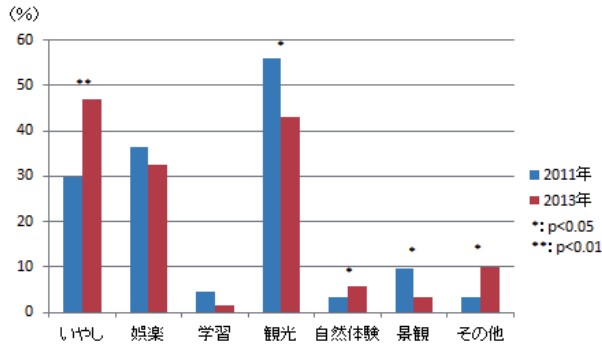


図3. 水族館への来館の目的

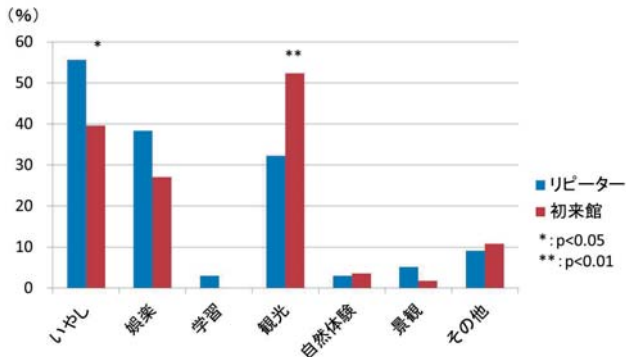


図4. リピーターと初来館者の来館目的の比較 (2013年)

#### 4. 考 察

西海国立公園九十九島水族館海きららの来館者を対象に、2011年と2013年の来館目的を分析したところ、「観光」から「いやし」にシフトしていることが確認された。また、そのシフトはリピーターにおいて顕著であることも明らかとなった。図5および図6は、来館目的の「いやし」につい

て抜き出し、再掲したものである。

これは、西海国立公園九十九島水族館海きららが掲げる「地域密着型水族館」というコンセプトが浸透しているものと考えられる。特に、九十九島に生息する水族にこだわった展示やイルカやクラゲの情報発信力の高さがこれを物語っている。特に、イルカでの日本初のプログラムや新種のクラゲの発見といったメディアでの露出が、長崎県内からの来館者を増やしたと思われる。「いやし」に関して言えば、これまでクラゲのいやし効果といった単独の水生物を対象にしたものや、水族館以外での水槽展示によるアクアリウムセラピーといった形が存在するが、水族館全体をストレス社会における心の健康づくりの場として積極的に活用することは

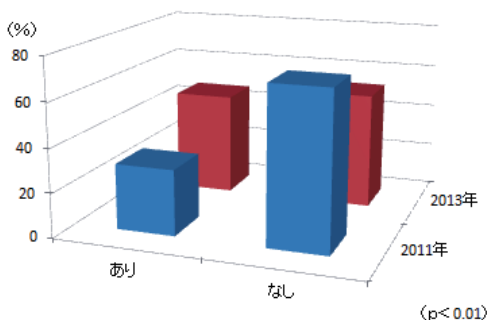


図5．2011年と2013年における「いやし」目的での来館の比較

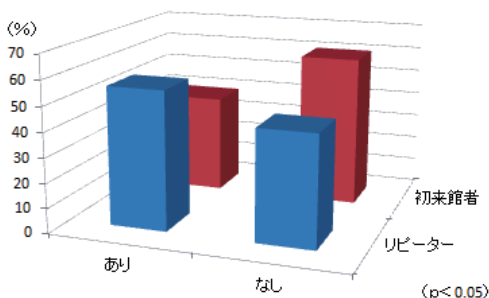


図6．リピーターと初来館者における「いやし」目的での来館の比較

これまでにない取り組みである。

また、大学研究室との連携も一要因である。先に述べたように、著者の研究室では、「自然館環境を活かした地域づくり・健康づくり」というテーマのもと、教育研究活動を展開している。その一環として、水族館の生物たちによる「いやし効果」に着目し、水族館をストレス社会における新たな健康づくりの場として活用する可能性について、心理学的な測定や生理学的な測定により得られた科学的根拠に基づいた提言と情報発信を行ってきた。その成果はメディアに取り上げられるものもあった<sup>2-4)</sup>。また、先に述べた効果の検証を行うだけでなく、創成教育における学習モデルであるサーキットモデル<sup>5)</sup>を参考にして、地域づくりの観点から、教材化による情報発信とその評価についても取り組んでいる。水族館のいやしポイントをマップ化し、さらにそれを掲載したフリーペーパーを作成し、水族館内に100部置いたところ、すぐになくなり水族館側で増刷するに至った。また、作成した教材について地元新聞社の取材を受け、大きく取り上げられたことで地域社会に広く発信できたことも大きな要因であろう<sup>4)</sup>。

このように、これまで一部の展示では「いやし」を意識したものはあったものの、水族館全体の活動あるいは地域社会への寄与として意識されていなかった、または薄かった健康づくりでの地域社会への貢献という観点から、水族館と大学研究室の連携により、科学的根拠に基づいた情報発信を、地域社会に対して効果的に行った結果と考えられる。

## 5 . まとめ

水族館と大学研究室が連携して取り組んできた活動とその結果の情報発信が、「いやし」を目的に訪れる来館者を増やすに至ったものと思われる。これにより、これまでになかった水族館の新たな社会的寄与の可能性を示した。

## 謝 辞

本研究を進めるにあたり、多大なるご協力を賜りました西海国立公園九十九島水族館海きらの館長川久保晶博氏を始めとする水族館職員の皆様に深謝いたします。また、連休中の多忙な中、アンケート調査に取り組んだ研究室の学生諸君にもこの場を借りて感謝したい。

## 引用・参考文献

- 1) 鈴木克美・西源二郎『水族館学』東海大学出版会、2005年。
- 2) 読売新聞『クラゲ観賞 癒やし効果 脱力系の舞い、時を忘れる』2013年6月27日。
- 3) 西日本新聞『クラゲに「癒やし」効果県立大研究室が「海きらら」で調査』2010年12月29日。
- 4) 長崎見聞『海きららで「癒やされて」』2013年1月26日。
- 5) 敷田麻実編著『地域からのエコツーリズム - 観光・交流による持続可能な地域づくり学芸出版社、2008年。